北海道新聞　29年11月23日（朝刊）

人口減対策の研究本格化

市と樽商大 来年3月末に報告

小樽市と小樽商大は22日、共同会見を開いて小樽の人口減少の要因と対策を探る共同研究を12月から本格化させると発表した。市民アンケートなどを詳しく分析して、有効な施策を打ち出す。森井秀明市長は「しっかり要因を突き詰めて施策に反映し、市民や多くの人に喜んで住んでもらえる街にしたい」と期待を語った。（元井麻里子）

アンケート詳しく分析

小樽市の人口は1964年に約20万7千人のピークを迎えて以降減少傾向が続き、10月末現在では11万9221人になった。出生数の減少や市外への人口流出に歯止めが掛からない。

市と商大が共同研究を行うのは初めてで、人口減少に関して行政と大学の研究は全国的にも珍しいという。共同研究では12月以降、市民約3千人のほか札幌や首都圏の住民にアンケートを実施する。既に8月から市内経済界や市議会関係者らから意見聴取を行った。

共同研究代表者を務める江頭進副学長と統計学や情報工学などを専門とする教授5人が資料やアンケートの分析を担当。「賃金・所得と出生率の関係」「教育の環境や水準が定住決定に与える影響」など複数の観点から人口減少の要因を詳細に調べる。その結果を基に、市企画政策室などとともに来年3月末に研究報告書をまとめる予定だ。

江頭副学長は、小樽の人口減少は雇用や医療、教育などいろいろな要因が指摘されていると述べた上で「本当にそうなのか一つ一つ検証したい。報告書にはかなり大きな問題が盛り込まれる可能性もある」と述べた。森井市長は実行すべき施策が見えれば、再来年度以降の予算編成に反映する考えを示した。

会見には市長のほか、上林猛副市長と小樽商大の和田健夫学長、江頭副学長が出席した。

人口減少に関する共同研究の記者会見で、互いに手を合わせる（左から）上林副市長、森井市長、和田学長、江頭副学長

小樽ジャーナル　29年11月22日

人口減少解決策は？市と商大が共同研究 (2017/11/22)

ツイート

小樽市(森井秀明市長)は、加速し続ける人口減少に歯止めをかけようと、国立大学法人小樽商科大学(緑3・和田健夫学長)と共同研究に踏み切り、科学的分析手法を用いた調査や施策を検討することとした。

本格的な開始に向けての共同研究の概要について、11月22日(水)15:00から市役所(花園2)2階市長応接室で記者会見を開き、森井市長・上林猛副市長・和田学長・江頭進副学長が出席した。

日本全体の問題としても人口減少社会となり、同市においても人口減少問題は、最重要課題となり、1964(昭和39)年9月に207,093人をピークに減少を続け、現在では、年2,000人前後が減少している。これまでも総合戦略の策定や様々な施策を実施してきたが、人口減少は止めることができないのが現状だ。

2008(平成20)年3月27日付けで、連繋に関する協定を締結している市と商大が、このほど、人口問題に関する共同研究チームを立ち上げ、要因分析や有効な施策検討を行うこととなった。

市側は、総務部企画制作室が中心となり、産業港湾部・福祉部・教育委員会の7名、大学側は、江頭副学長が同研究の代表者となり、開発経済学や統計学・情報工学等を専門とする教授6名が参加し、人口減少の要因の発見に努める。

森井市長は、「商大の皆さんと学術的知見や、科学的分析手法などの力を借りて、具体的な取り組みを進めたい。共同研究に市の職員が関わることで、知見等が共有できることも期待している。研究結果に基づき、2018(平成30)年度以降の施策に反映したり、さらには、総合戦略に改訂や、次期総合計画等にも盛り込んでいければと思う」と期待を寄せた。

和田学長は、「今回は、人口減少の政策課題に、一緒になって共同研究する連繋の新しい形。人口減少は深刻な問題で、多くの方が様々な原因を語っているが、正しい政策を打つためには、原因を正確に科学的に把握し分析することが前提となる。今回の共同研究が、適切な政策を考える上で貢献できれば、大学としても光栄」と述べた。

江頭副学長によると、小樽の人口減少問題の根本原因を科学的な手法を用いて探り、解決に向けての処方箋の提言を行う。

今年8月から関係者(市長・副市長・各会派代表、商工会議所、観光協会、中小企業同友会)と、人口減少の原因・それに対しての施策・小樽市の将来像のヒアリングを開始し、10月に終了。12月からは、市民3,000人へ郵送でのアンケート調査と札幌市民へweb調査を実施し、問題意識や将来ビジョンに関する共通点を探り、地名度があるにも

北海道新聞　29年11月23日（朝刊）

あんかけ焼きそば事典改訂

4年ぶり　小樽商大江頭ゼミ生

56店、喫茶店やすし屋も

小樽商科大生が「小樽あんかけ焼きそば事典2017」を発行した。2013年に出版した事典を4年ぶりに改訂。小樽市内などであんかけ焼きそばを扱っている56店を紹介している。中華料理店にとどまらず、喫茶店やゴルフ場、温泉施設、すし屋も取り上げた。（徳留弥生）

「小樽あんかけ焼きそば事典2017」と作製に関わった小樽商科大生たち

事典は、江頭進教授のゼミで学ぶ3、4年生が作製した。前回13年の発行後、あんかけ焼きそばを広めたといわれる中華料理店梅月などの老舗も閉店。担当者は「誰かが記録をしないと市内の食文化がすたれてしまうと思った」と話す。

ゼミ生は今年3月から半年間取材をして、10月10日に2千部を発行。南小樽、築港、朝里など市内を6エリアに分け紹介。あんかけ焼きそばのルーツを説明するコラムも掲載している。

市内ではウイングベイ小樽の喜久屋書店（築港）や紀伊国屋書店（稲穂2）などで扱っている。コンビニやインターネット通販のアマゾンでも販売。A5判、97ページ。486円。

北海道新聞　29年11月24日（朝刊）

リース 拾って作った！

小樽商大生企画のお散歩工作会

小樽公園で拾った松ぼっくりや落ち葉などでリース作りに挑戦した子どもたち

【小樽】小樽商大の学生が23日、子ども向け「お散歩工作会」を小樽市の市公会堂で開いた。市内の小学生6人がモミジやイチョウ、松ぼっくりなどを使ってクリスマスリースを作った。

大学の科目「商大生が小樽の活性化について本気で考えるプロジェクト（マジプロ）」を履修する学生が初めて企画した。小樽の自然の中を散策し、体を動かす楽しさを知ってもらうとともに、リース作りを通じて発想力を養うのが狙い。

子どもは小樽公園を散策した後、学生らとリース作りに挑戦。拾った落ち葉や木の実などで飾り付けし、思い思いのデザインで完成させた。小樽市立稲穂小2年の高木凛乃（りの）さん（8）は「松ぼっくりをツリーに見せるように工夫した」と笑顔で話した。（三坂郁夫）